

六月の花「あじさい」

今井 百里江子

梅雨前線の東上を思わせる空模様の頃になると、庭の「あじさい」の卵形の広葉の緑は滴るばかり色濃くなる。其の先に集まる小花は、まだ淡緑の塊まりに過ぎないが、やがて空がいよいよ低くなり、空気も淀み、鬱陶しい梅雨に入ると、飾り花と呼ばれる小花は四枚の花弁に紛う大形の萼片を上げ、花の集まりは美しい手毬となる。一ヶ月余も続く長い梅雨の間を時に烈しく時に静かに降り注ぐ雨を存分に吸って、花は鮮やかな青色となり次第に美しい青紫色に変わってゆく。「あじさい」は神奈川・伊豆半島・伊豆七島の山地に自生する「がくあじさい」を母種として日本に生まれた園芸品種であり、学名 *Hydrangea macrophylla* Ser. var. *Otakasa Makino* と云う。学名中のオタクサは江戸時代の終りに日本へ来航し西洋文化の開花に貢献したかのシーボルト (Philipp Franz von Siebold

1796～1866) が、その日本人妻楠本お滝を記念して命名したものであるとされて居る。

* * * *

ドイツの医学・博物学者ジーボルトは一八二三年二十七才の時オランダ商館附医員として長崎に着任し、我國の動・植物・地理・歴史・言語等を研究した。また鳴滝塾を開いて高野長英等に医術を教え、或は実地に診療を行ったが、一八二八年帰国の際国禁の地図を所有する事が発覚し罪を問われ、日本御構(おがま)(入国禁止)を申渡され長崎を去った。後年許され一八五九年再び来航、幕府の外事顧問となった。一八六二年オランダに戻り翌年官職を退き故郷ヴェルツブルグに帰ったが、一八六六年病を得てミュンヘンで死去した。「日本」「日本植物誌」「日本動物誌」等を著わした。彼は始めて来日した折、長崎出島商館長の江戸参勤に従って江戸に赴いたが(一八二六年二月十五日―七月七日)、その折の見聞を「江戸参府紀行」として著わして居る。時しも梅雨の頃伊豆付近で「あじさい」を採集した事が記されてある。

来日間もない頃(一八二三)、長崎丸山の引田屋の遊女其扇(そのあき)と相知り、落籍し鳴滝塾に移した。其扇(一八〇七―一八六九)は楠本お滝と云い、十五・六才の頃引田屋鉄之助の抱遊女として売られ丸山の「山の花」と謳われた。その瞳が魅力に輝やく美貌の持主であったという。彼が三十才、彼女が十九才の年であった。彼は年齢・人種・国境を越えた誠実な愛を美しい遊女に傾け、日常「おたくさ」と呼んだという。文政十年其扇二十一才の

年一女をあげ阿伊禰と名付け幸せな日々が続いたが、滞日六年後、思わぬ罪を得て日本を立去る事となった。彼を乗せた蘭船ホウトマン号が長崎の港口小瀬戸を將に過ぎようとした時、一隻の小舟がこれに近づいた。この中には漁夫に身をやつした門人、高良齋と二宮敬作がその身に降りかかる危険を顧みず、お伊禰を抱いたお滝を守って乗って居た。蘭船からボートが降され小舟に漕ぎ寄せられた。中にはジーボルトが最後の別れを惜しんで乗って居た。彼は良齋・敬作にお滝・お伊禰の将来をくれぐれも托し、別れの悲しみに耐えつつ去って行つた。お伊禰は二才八ヶ月であつた。帰国に際して彼は一つの香盒を造らせ、その中に二人の毛髪を納めて持歸つた。黒漆塗の盒子の蓋の表にはお滝の姿が、裏にはお伊禰の可憐な稚兒姿が優美な青貝象眼により描かれてあつた。帰国後の彼は日本研究家として学界に名を馳せたが、常に日本を恋い、残し置いた妻子の上を片時も忘れる事が無かつた。かの香盒は常に彼の座右に置かれて在つたという。

一八五八年オランダと通商条約が結ばれ日本に於ける国禁を解かれた彼は翌年再び懐しい日本を訪れる事となった。彼は六十三才であつたが、五十三才の折ベルリンで結婚した妻との間に得た長子アレキサンドル（十三才）唯一人を伴つての来日であつた。彼が後事を托した良齋は既に亡かつたが、敬作は病の身をおして、お滝・お伊禰・お伊禰の娘たかと共にこれを迎え再会の喜びを分ち合つた。ジーボルトは良齋・敬作の兩人が、依托した愛児を良く守り養育し立派に世に立たせた事を深く感謝した。お伊禰は其の時三十二才、既に産科医として自立して居た。お滝は彼の帰国後他家に嫁したが、其後夫を亡くし

て独り銅座町に在って油屋を営んでいたが、再び彼にまみえて、万感の思いにくれたという。一八六二年帰国に当りお伊禰の成人を眼のあたりにした彼は、持ち来っていた香盒を、今は用無しとして楠本家に贈った。

故国ドイツに戻った彼はミュンヘンで病にたおれ「美しい平和の国へゆく」と云う最後の言葉を遺して生涯の幕を閉じた。慶応二年・七十才であった。お滝は三年の後明治二年没した。六十二才であった。

* * * *

牧野新日本植物図鑑 牧野富太郎著 前川文夫・原寛・津山尚 改訂編集

一九七七 北隆館

原色図譜園芸植物 浅山英・太田洋愛・二口善雄・一九七一 平凡社

江戸参府紀行 シーボルト著 斎藤信訳(東洋文庫87)一九六七 平凡社

シーボルト先生その生涯及び功業 吳秀三著 岩生成一解説

- 1 東洋文庫103 一九六七 平凡社
- 2 東洋文庫115 一九六八 平凡社
- 3 東洋文庫117 一九六八 平凡社